

しきことあらん、こなたへと申せとて、やがて面をあはしけり、脩靜ふかく歎びて、夙くより思ひ起せし志願の由を説示し、山陵志著述の爲に、古き御陵を尋んとて、旅寐をしつることの趣云云とかたりいづるに、蘆庵も只管感歎して、足下は得がたき學士なり、さる志ならんには吾庵に杖をとゞめて、こゝらわたりの御陵をしづかに訪求したまへとて、又他事もなくもてなしけり、これにより脩靜は日毎に古陵を尋巡に、ともすれば日暮て歸るを、主人は自ら風呂を焚て浴させぬる老人の心づかひを胸苦しことて辭とも從はず、これ等の事は、只管に客を愛する故のみならず、吾も亦かゝる奇人に宿することの歎しさに、足下の疲勞を慰て、恙なけれと思ふよしは、國の爲に力を竭す人の助にならんとてなり、必辭退したまふとて、後々までも然かしてけり、

〔陵墓一隅抄序〕戊申元年○嘉永春、余觀花於芳野、過上市村、偶見一古謄本於店頭、引而檢之、乃具載帝陵頗備焉、但不記著人姓名、購歸雜之史籍、他日閱之、宿昔疑之、未能質明者、渙然冰釋、其爲喜何如歟、于嗟山陵之頽廢也久矣、彼大和河内之諸地、有其物而名或不正、若我京郊、其物旣亡、名亦隨亡、悲哉、繇是前賢往々覃思極力、各就所見、樹一家之私議、譬如松下見林廟陵記、蒲生君藏山陵志等、雖頗益後生、務主闊博、一從一違、同異混淆、不免封菲勞采也、顧茲瑣々冊子、未足窺作者全力、然而精鑿的實、較諸前書大有徑庭、余倍珍重、以示之於老友水島永政、永政亦奇之、反覆數回、謂余曰、今熟玩其辭意、非淺者之所能辨、其或成於若宮水枝之手、水枝者、濃國郡上之一祝氏、自少慨山陵及式社之荒涼、著書有數種、嘗與同列不合、逃居京師、終赴和沒於龍門土神之祠、官惜哉、天祿不長、名亦不顯、斯書必係其遺筐之物也耶、余深然之、後屢誘永政拜聖蹟、每挿之行囊、苟有所見、輒加私註、題曰陵墓一隅抄、別作圖副之、頃者俱謀、更校訂以傳之世、覽者留意於茲一隅、庶幾三隅可以反矣歟、時嘉永甲寅春正月平安後學津久井清影撰、